



証明写真

11月22日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

11月22日のおはなし「証明写真」

予想していたこととはいえ、検索した新聞の紙面にその写真を見つけたときにはさすがに眩暈がした。

それは2011年の11月にある火事で行方不明になった身元不明女性の写真だった。身元不明で行方不明の人物の写真がどうしてあるんだ？と誰しも疑問を覚えることだろう。いささかわかりづらい記事をじっくり読むと、その場に落ちていた運転免許証の写真部分が損傷せずに残っていたため、身元は分からないが顔写真はあるという奇妙な事態を招いたらしい。単なる偶然の被害者かも知れないし、当然のことながら放火犯である可能性も残されている。そのあたりの方針が決まらない段階で書かれた記事なので、すっきりしない表現になっているようだ。

写真を見る。整った顔立ちだ。免許証の写真という大抵は目を見開きすぎていたり、表情を決めかねているような中途半端な顔つきになっていたり、顎を突き出していたり、首の角度が微妙に傾いていたり、顔の中心がやや左右のどちらかに振れていたりと、つまり大抵はあまり人に見せたくないようなことになっているものだが、この写真は違う。たくさん複写してみんなに配りたくなるような出来の良さだ。スタイリストが整えたような髪型、シックな淡い臙脂のスーツはブルーの背景とのコントラストが計算されたように見事で、あいた襟元には小さくではあるがネックレスも見える。広い額に流れる軽くウェーブした髪。涼しげな目元。口元には誰もが好感を持つ微笑。

火事の被害者もしくは放火犯の写真とはとても思えない。でも話のポイントはそんなことではない。これが間違いなく彼女だということが問題なのだ。

その火事で私は長年の友人を失った。彼はその建物の管理人としてそこに住み着いてひっそりと暮らしていたのだ。長い歳月、十分な注意を払って生きてきた賢明な友人。我々の間でもひととき優れた知性の持ち主で、重要な決定事項があると必ず相談役を務めてきた彼がいとも簡単に命を落とした。いまでもまだ彼が死んだことを信じられない気がする。しかし感傷に浸っている暇はなさそうだ。記憶をもとに13年前、京都で命を落とした知人の記事を検索する。これは土砂崩れによって走行中の自動車数台が巻き込まれて爆発炎上したという無惨なものだった。記事を発見し私の胸は冷たくなる。やはりそうだ。そこにも彼女の写真があった。これはいったいどういうことだ。

さらに遡り、1982年、長老が命を落とす原因になったガス爆発事故の記事にもその写真はあった。モノクロではあったが間違いなく、同じ女だ。1964年、私の若い友人の命を絶った飛行機事故の搭乗者写真の中にもその女はいた。偶然だとは思いますが私の友人の写真のすぐ上に。もはや疑う余地はない。この女は時間をかけて我々の一族を抹殺しようとしている。ではなぜわざわざこのようなまわりくどいことをするのだ。自分の顔写真を残して、まるで挑発するかのよう。気づかれることなどないと思って、単に愉快犯的にサインを残しているのか。それとも誰かに対して「仕事をした」ということをアピールしているのか。

何のために？ この写真を見る限り、全く年を取らずにこれだけの歳月を越えていることを見る限り、彼女は我々の同族だ。だとしたら、なぜ仲間であるはずの我々を殺して回るのだ？ 1週間前、私はそうとは気づかずに彼女に目をつけた。あくまでも、私が生き続けるために必要なエネルギーをもらうための標的として。独り暮らしで隙だらけ、手もなくコントロールできる恰好の標的。けれどもある日ちょっとしたことがきっかけで気がついた。それは間違いで、実際には彼女の方が私の前に姿を現したのだ。ちょっとしたことは、ネックレスだ。襟元のネックレスは証明写真の女のものだった。新しい標的だとばかり思っていた女は、とんでもない、我々を狩る追跡者だったのだ。

図書館の新聞検索システムを終了すると、プリントアウトを持って席を立った。早く仲間たちに知らせなければ。他にも気づいている者がいればとっくに連絡が回ってきているはずだ。なに

しる電話さえなかったあの時代とは違い、いまはインターネットだ、携帯電話だと、便利なものがあって世界のどこにしようがEメールで連絡を取り合えるのだから。そう考えていると、エレベーターの扉が開く瞬間にメールの着信が来る。私は苦笑しながらエレベーターに乗り込み、携帯をチェックする。メールには本文がなく、ただ添付された彼女の顔写真が表示されているだけだ。誰からだろう？ その瞬間に停電が起こり、手元の女の微笑み以外は一切が暗闇に閉ざされる。

(「追跡者」 ordered by shirok-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

証明写真

<http://p.booklog.jp/book/39436>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39436>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39436>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.